

太宰治の「女生徒」と「皮膚と心」論

——「女生徒」と「皮膚と心」におけるジェンダーの世界——

李 顯 周

一、はじめに

太宰治の得意としている女性独白体形式の小説「女生徒」(『文学界』昭和十四年四月)と「皮膚と心」(『文学界』昭和十四年十一月)は、女性の内面描写のうまさが一際目立つ作品として発表当時から現在に至るまで好評を受けている。それは男性作家太宰が女性語をうまく扱って女性を表現したことに対する評価とも言える。日本語の場合、他の言語より男性語と女性語の区別が明瞭になっていることから考えると、女性独白体という形式で男性作家が女性語を使用して女性を描く際に起こりうる問題をジェンダーの視点から考えてみたいと思う。それというのも、女性である本稿の筆者から見ると、「女生徒」と「皮膚と心」には作品全体にわたって表われる女性性の強調と男女の性差意識が他の作品よりも強く感じられるからである。

したがって本稿は、二つの作品の根底に根深く潜められているジェンダー意識を分析するとともに、そこに認められるのが太宰治という作家のジェンダー意識なのか、それとも彼自身をも無意識的に包み込んでいる日本の伝統社会が形成してきた女性性に対する固定観念や性差意識の反映なのかを明らかにしたいと思う。

二、「女生徒」と「皮膚と心」における女性独白体

「女生徒」と「皮膚と心」は女性独白体形式の小説である。女性独白体形式は「太宰には手だれの形式と手法」と評価

されているように、女性を描くための手段として太宰がよく用いた形式である。その中でも、この二つの作品は、現代の評価において「太宰のとりあげた女性独白体の文体が実に良く生かされた作品である」とか、「女性独白体による女性心理のみごとな描出」と言われるように、女性独白体という形式そのものに対して高い評価が与えられている。

「女生徒」と「皮膚と心」の女性独白体は発表当時から文壇にも注目をされていた。その点を次の二つの同時代批評から考察してみることしよう。

彼の新著「女生徒」一巻を通読していると、彼の近頃の作品は、昔と比べものにならない位、おほらかさを増してきている。巻中の「女生徒」は世評の高かった作品であるが、これが成功した原因が、単に傍観的に少女を描いたのではなくて、少女に仮託して、自己の心境を述べたそのために生じた肉付けの豊かさに在るだろう。(中村地平『新刊書評』昭和十四年九月)

太宰治の「女生徒」「愛と美について」、前川左美雄の詩集「くれない」敢えて新風という言葉を使うなら、これらの諸作こそ新風であろう。(亀井勝一郎『再生の歌』昭和十五年十二月)

ここで、中村地平と亀井勝一郎が述べている「昔と比べものにならない」「新風」という言葉が意味するのは、太宰治のいままで書いてきた「一般的に、頹廢とか虚無とか称せられてある」という評価を受けていた「自虐的私小説」とはまったく異なる手法の小説の新しさを意味しているのだろう。女性独白体形式の小説は、太宰の多様な試み(例えば聖書・西洋古典・中国古典・故郷としての津軽・日本の昔話を素材として描くことなど)の中で特に多く用いられていることから、太宰が最も好んだ形式であった。その当時太宰自ら女性を描くことに興味を示し、その方法として女性独白体を取り上げた理由を明らかにしていると思われるエッセイに注目してみたい。

男と女は、ちがうものである。あたりまえではないか、と失笑し給うかも知れぬが、それでいながら、くるしくなると、わが身を女に置き換えて、さまざまの女のひとの心を推察してみたりしているのだから、あまり笑えまい。(中

略)男は女になれるものではない。女装することは、できる。これは、皆やっている。(中略)小説を書きはじめて、女性を描くの、多少、秘法に気がついた。

ここに述べられている「女装」「秘法」という言葉の意味は、男性作家が女性語を借りて女性を描く手法を太宰が確かに会得したことを意味していると解釈できる。この言説の背景は太宰がそれまでに「女人の創造」(昭和十三年十一月)を執筆した後、「女生徒」(昭和十四年四月)、あるいは「皮膚と心」(昭和十四年十一月)など数多くの女性独白体小説をたて続けに執筆した経験に裏付けられている(後に女性独白形式の小説を收拾して「女性」(昭和十七年六月)という創作集が刊行される)。また「女生徒」と「皮膚と心」には女性語だけではなく、女性特有の表現(感嘆詞が多い・くり返しの表現)が目立つなど、女性の特徴がうまく描かれている。

しかし、太宰の女性語について「意識的にすぎるほど、女性に仮託した表現で書こうとしている」という指摘もあることは注意される。そこでまずこのような指摘をふまえて、太宰が女性を描くために女性独白体を用いた理由を探ってみたいと思う。ヨーロッパの男女の役割転換の礼儀に関するナタリー・サミュエル・デービスの論文の中に次のような文章がある。

このような礼儀は、男性の相対的な優位を強化する一方で、女性性の表現も行なうわけです。両性がお互いの役割を交換することで、逆に両性の違いを浮き彫りにすることも可能なわけです。(中略)男性は、女装することによって、男の姿の表現力を、女性のパロールを借りながら日頃いえないようなことを表現する⁵⁾

この言説によれば、男性が女装をする際、女性性を強調させる扮装(胸やお尻を強調するなど)をすることが多いことを考えてみると、男性が女装する心理と男性作家が女性語を使用して女性を表現する心理との間には密接な関係があると思われる。したがって、このデービスの説明を太宰の女性独白体に援用することが許されるならば、太宰は、女性語を借りて女性自身では表現できない、あるいは気づかない女性の実態や、もつとも女性らしい姿や言動を表出しようとする意図があったのではないか。特に「女生徒」と「皮膚と心」には、女性性を強調したり、男女の性差をことさらに強調する

表現が目立つことから、「両性の違いを浮き彫りにする」という概念を太宰の女性独白体の意図に適用できると思っただけでよからう。このように、太宰の女性独白体は、男性のまなざしだからこそ見える女性性を強調して、男女の性差を浮き彫りにすることによって、あえてジェンダー意識を強調する役割を果たそうとする一つの手段であったとも言える。

三、「女生徒」と「皮膚と心」におけるジェンダー意識

前節で言及したジェンダーの視点から「女生徒」と「皮膚と心」の叙述を分析すると、意外なことに女性性を浮き彫りにする中で、とりわけ女性性の不潔さを強調した箇所が目立つ。この女性性の不潔さを強調することによって浮かび上がる男女の性差意識を分析しながら、両作品の背景に流れている太宰のジェンダー意識を明らかにしたいと思う。

太宰の女性独白体の小説群について荒木美穂は、「女主人公の、その心理に共感しながらも、心の中にはいつも「不快感」とでも言おうか、嫌な気分が生じるのである」と指摘すること、これらの小説から男性には感じられない「不快感」を自分をふくめた読者の女性たちには感じられることに疑問を投げかけている。確かに、太宰の女性独白体形式の小説、特に「女生徒」と「皮膚と心」に対する男性批評家の同時代評や、それらの作品に関する先行論文をみると、例えば、三戸武夫が

太宰治の「皮膚と心」は、するすると一気に読み通せる楽しい小説である。作者が楽しんでゐるその楽しさが読者にも通じて、何気なく楽しいと云った作品で前作「女生徒」とその点共通である。¹⁷

と言うように、「音楽じみた効果をおさめている」¹⁸、あるいは「おほらかさを増してきている」¹⁹、さらには「女性心理のみごとな描出」¹⁰などの言葉が示すように、荒木美穂が指摘した「不快感」を受けるところか、むしろ、それとは対照的に「明るくて、楽しい」という評価がなされていることがわかる。もちろんこの二つの作品には、女性として共感できる所も多いことは確かであるが、作品全体から与えられる印象としては、女性からすると、必ずしもそうだと断言できない叙述が数多くみられる。その一例として不潔さの強調などが挙げられるのだが、それは他の女性独白体の小説よりも、こ

の二つの作品にはいちじるしく目立っていて、女性の心理の暴露や女性性の強調と同時に、男女の性差をことさらに意識した叙述が明らかに読みとれるからである。したがって、この二つの作品から読む側の男女の共感度に著しい差異が生じてくることはありうると考えられる。特に女性性を「けがれ」とする観念が両作品から強く感じられることは避けがたい。

そこで、女性性の不潔さと男女性差意識が浮き彫りになっている叙述を中心に作品分析を行いたいと思う。そのことがこの二つの作品の背景にある太宰、あるいは時代のジェンダー意識を明らかにしてくれるのではなからうか。そのために、まず「女生徒」と「皮膚と心」の素材選択、すなわち思春期の少女と皮膚病の新婚女性が設定されていることから考えてみよう。というのは、この素材自体の選択が実は女性が自分の肉体にもっとも敏感に反応するカテゴリーであるからである。

これらの作品が書かれた当時の女性雑誌の広告欄¹⁾を参考してみると、化粧品や女性の皮膚に関する広告と女性の生理に関する用品の広告がほぼ八割以上を占めていた。これは今も変わらないかもしれないが、ともかくも、当時の女性たちがいかに皮膚や身体の変化に敏感だったかを示している。この二つの作品はそのような女性の意識をふまえて選択されたのではないかと思われるほどである。広告という媒介を通して太宰は、生理や皮膚への敏感さにこそ女性が女性性をもっとも意識しやすいカテゴリーだと考えたのではなからうか。

具体的な実例をとりあげてみることにしよう。「女生徒」には、思春期の少女が自分の肉体が段々成熟していくことから抱き始める、女性性への嫌悪感や不潔さを主人公は次のように感じていた。

バスの中で、いやな女のひとを見た。襟のよごれた着物を着て、もじゃもじゃの赤い髪を櫛一本に巻き付けている。手も足もきたない。(中略) ああ、胸がむかむかする。その女は、大きなおなかをしているのだ。(中略) 雌鶏。電車で隣りあわせた厚化粧のおばさん(赤ん坊を背負っていた)も思い出す。ああ、汚い、汚い。女は、いやだ。自分が女だけに、女の中にある不潔さが、よくわかって、歯ざしりするほど、厭だ。

ここには、少女から娘への成長の過渡期には、自身が生理を経験することによって、主人公が逆に、生理↓妊娠↓出産

という女性しか持たない自然法則に反感をもち、その反感はまた他の女性の女性性に対する不潔さへと増幅していく屈折した心理が語られている。電車の中の子供を背負っていたおばさん・バスの中で出会った妊婦に感じられた不潔さは、主人公自身の肉体がいよいよ女に変化して行くことに気づき、自分も「汚い女」になって行くのだと自覚するようになる、その微妙な心理が写し取られている。

肉体が、自分の気持と関係なく、ひとりで成長して行くのが、たまらなく困惑する。めきめきと、おとなになつてしまふ自分を、どうすることもできなく、悲しい。(中略) いつまでも、お人形さんみたいにならだでいたい。

自分も「汚い女」になつて行くのかという自覚は、それ以上成長しないきれいなお人形のからだの憧憬につながる。それは、大人になることによる社会的立場などの不安ではなく、少女から成熟した女性になっていくこと、すなわち肉体の成長に困惑する少女の感性として描かれている。その心理は少女の潔癖さの感傷であろう。少女から娘へという肉体の変化にともなう心理の微妙なゆれが見事にとらえられている。しかし、主人公が女性の不潔さを妊婦や赤ん坊を背負った女性に感じるのは、「日本における女の生理、月経を、汚れものと見る」¹²、「女性の月経は不浄であり、自然に神仏を汚す」¹³という女性に対する固定観念が働いているからだと思われる。女性の月経、妊娠、出産が不潔だという認識は日本伝統社会がもたらした観念であることは言うまでもない。このような少女のままでもどまりたいという願望と、それと裏腹に女性性の不潔さに対する嫌悪はエスカレートして行つて、自分を理性のある人間ではなく、「雌の体臭を発散」させる感覺的動物として認識してしまう。

こうして一日一日、自分も雌の体臭を発散させるようになって行くのかと思えば、また、思い当たることもあるので、いつそこのまま、少女のまままで死にたくなる。ふと、病気になりたく思う。(中略) 汗を滝のように流して細くやせたら、私も、すつきり清浄になれるかも知れない。

「人形」「清浄」への願望は「不潔」な女になることへの拒否を意味している。思春期の少女が自分の肉体の成熟に嫌悪

感や反感を抱く現象が思春期の少年には見られないことから考えると、女性性は不潔だと決めつけているジェンダー意識が思春期の少女の意識を強くとらえていることが感じられる。このように、「女生徒」の主人公の心理に見られる女性性に対する「不潔」だという観念の背後には強烈なジェンダー意識がひそんでいてと認められる。

「女生徒」には、少女の眼からする成熟した女性の肉体的不潔さが浮き彫りにされているが、それに対して、「皮膚と心」には、女性の肉面的不潔さが強調されると共に、男女の性差意識が一層明確に表面化されている。この作品の主人公は皮膚病で神経質になっている新婚の女性である。彼女は吹き出物がからだ中に広がっていくにつれ、自分の内面にある不潔さに気づくようになっていくのだが、その過程が繊細な心理描写を通して読みとれる。

女って、こんなものです。言えない秘密を持っております。だって、それは女の「生まれつき」ですもの。泥沼を、きつと一つずつ持っております。(中略) 女には、一日一日が全部ですもの。男とはちがう。死後も考えない。

思索も、無い。一刻一刻の、美しさの完成だけを願っております。生活を、生活の感触を、溺愛いたします。

主人公によれば、女は感覚的・動物的で、男は観念的・理性的だと認識されているのだが、その認識には二項対立的な性差意識がはつきり見える。そのような性差の認識の背景にも、日本社会に根深く存在している男性優位主義が存在していることがわかる。しかも、主人公自身はそのような女性の生息は変えられない宿命のようなものとして認識し、男性の生息とは対照的であることが強調されている。ジェンダー意識が主人公の心理に深く浸透していることがうかがえる叙述である。女性性は不潔だという主人公の自覚は、次の「プロステチウト」という言葉に含蓄されて表れている。

プロステチウト、そう言おうと思つていたのでございます。女が永遠に口に出して言つてはいけない言葉。そうして一度は、必ず、その思いに悩まされる言葉。

新婚の女性が自分を「プロステチウト」化しているのは、皮膚病による肉体的汚れを意味しているのではない。それは皮膚病を直すために訪れた病院が、「もうひとつ、とても平気で言えないような、いやな名前の病気」、すなわち性病の専

門医でもあることであつた。「もう皆、この待合室に、うなだれて腰かけている亡者たち皆、そのほうの病氣のような気がしてきて」と考え込むようになり、「ここは、きたない」と言いながら、不思議なことに、そう言つたあとで、「あたしは、ここにいるのが、一ばん楽なの」と言う。性病ということに敏感に反応しながらも、自分も性病者に同化して、「ここにいるのが、一ばん楽なの」と感じているのはなぜだろう。それは、主人公は女性性は「きたない」という観念を抱いているからである。すなわち「きたない」女性が「きたない」病にかかつているひとたちと一緒にいるのが最も自然で、安心できるという思い込みから起因しているのではないか。心の中に抑圧してきた女性性の「きたなさ」が、性病への疑いということからあからさまにさせられたことによる一種の解放感が口を突いて出てきたとみるべきだろう。

そのような自棄的な開放感を一方で抱きながら、またその一方で主人公は、「ひよつとしたら、この吹出物も」と、自分が夫の最初の女でないことに気づき、夫から性病を移されたのではないかと夫を疑うようになる。

あの人にとっては、私は最初で無かつたのだ。ということに実感を以て思い当たり、いても立てても居られなくなり
ました。だまされた！結婚詐欺。唐突にそんなひどい言葉も思い出され、あの人を追いかけて行つて、ぶつてやりた
く思いました。

自分を「プロステチウト」化しているのは、性病の夫によって処女性を汚されたからだになつてしまつたという妄想だけではなく、それが原因になつて内面（心）まで汚れてしまつたと思ひ込むようになったからだ。主人公にとって「プロステチウト」という言葉には、肉体と内面（心）が共に汚れているという意味が含蓄されているのである。「プロステチウト」＝「汚い女」という認識の根底には、女性性に対する過度に肥大化した「不潔さ」の意識の存在が考えられる。主人公にとってジェンダー意識は、たんに社会分業の問題だけではなく、彼女の精神の内部にまで沈潜させられている性差の宿命なのである。

このように主人公の自覚を深刻化させている女性の性（セックス）を汚れとみる観念は日本社会の制度や慣習の根源に存在していた。そのことは近年のジェンダー研究によって明らかにされつつある。例えば、

性とけがれ、つまり女性をけがれみたくないものとして差異を差別化するような形で、日本のいろいろな制度とか、文化というのはつくられている^[4]

という見解は、日本社会における性・文化・制度にみられる性差の根底に〈汚れ〉という観念がたらぬいていることを指摘したのだが、それは、かなり古くから日本に根深く存在している観念である。太宰は主人公の造型にこのような〈汚れ〉（「不潔」）の意識を表出しているが、その造型は日本社会のジェンダー意識の根源に触れていたのである。この制度と文化にみられる性差によって、男性の側からする女性性の「不潔さ」に対する意識と、それに対して女性の立場から感じられる「不潔さ」の間には大きなギャップが生じているのではないか。

「女生徒」と「皮膚と心」に見られる主人公の感性に対して読む側の男女によって共感に差異が生じるのは、日本の伝統的な制度や文化によって決めつけられている性差意識すなわちジェンダー意識が働いているからだと思われる。したがって、この二つの作品の主人公に対して「不快感」を感じ取るのは、ジェンダーを意識している女性たちに限られているのではないか。しかし太宰は、「女生徒」と「皮膚と心」にはジェンダー意識に目覚め、それに反感を持つ女性ではなく、自ら女性であることを自覚し、女性性に対する社会の差別を女の宿命として受け入れている女性像が描かれている。それはまさに男性の作家による女性の心理描写だからこそできたものではなからうか。太宰はむしろその心理の動きに女性らしい女性をとらえたと自信をみせていたと考えるよからう。

四、「女生徒」と「皮膚と心」の対照化された男性像

「女生徒」と「皮膚と心」にうかがえる女性の性差意識を一層明確にさせているのは、対照化された男性の存在である。この二つの作品に描かれている男性像は、みずからの女性性に苦悩する女性を支える役割を果たしている。例えば「女生徒」では、少女が肉体の成熟による不安を感じるようになった時、支えになるのは「お父さん」の存在である。主人公が父を頼りにする内面を、

お父さんいない。やっぱり、お父さんがいないと、家の中に、どこかに大きい空席が、ポカンと残って在るような気がして、身悶えしたくなる。

と描くことで、父の不在による不安を率直に語っているところにきわ立っている。というのは、「お父さんは、立派なよいお父さんだった」という父に対する思いに対して「お母さんだって、私だって、やっぱり同じ弱い女なのだ」としみじみ感じるようになるからである。この心理の背景にもやはり、男は強く、女は弱い者と決めつけるジェンダー意識が見て取れる。

この小説世界では主人公の少女にとって道徳観念や価値観の規準となっているのは、父親と親戚の男性たちである。またその道徳観念や価値観による良妻に憧れている心境も語られている。

奥さんの場合は、ちがうんだ。この人のために一生つくすのだ、とちゃんと覚悟がきまつたら、どんなに苦しくとも、真黒になつて働いて、そうして充分に生き甲斐があるのだから、希望があるのだから、私だって、立派にやれる

「女生徒」にみられる男女の人物関係は家という空間に限られている。したがって、その小説空間の中心になっているのは男性の父親であることはいうまでもない。その世界は家父長が支配する家族制度の世界である。太宰は女性の生活圏が家族制の内部にしかないという、無意識といつてもよい観念から、主人公たちの世界を家という空間に設定した。家こそはまだ男性優位主義が温存されていた、男性にとつては古き良き小宇宙であった。それゆえに、主人公の女性は父の存在を中心とする価値の秩序を自らの内部に植え付けていたわけである。

それに対して「皮膚と心」に登場する夫は、最初は軟弱で消極的な人物として描かれている。しかし皮膚病がからだ中に広がって行くことによって、意識まで感覚的になつていく主人公の女性の心の変化に対して、夫の造型は対照的に変貌していく。すなわち皮膚病がからだ中に広がってゆくにつれ、自己喪失↓化物・鬼・悪魔↓プロステテウトとみずからを卑下させていく妻とは対照的に、夫はその妻を支える強くて優しい男へと変貌していくのである。「やあ、こんなところにあったのか。しよげちやいけねえ」と、不安にとらわれている妻を慰める言葉にも夫の変貌がみてとれるのだが、その変

貌は妻のまなざしを通しての相対的な夫婦関係の変化によるものであることが次のプロットではつきりする。
 次の日、皮膚病がひどくなって心細くなっている妻は、遅しく頼りのあるいままで見たことのない新しい夫の姿を発見するのである。

「よし。泣くな！お医者へ連れていってやる」あの人の声が、いままで聞いたことのないほど、強くきつぱり響きました

そんな優しさにふれて妻は、そして皮膚病が性病の専門医でもあることを知ってから、「ここは、きたない。あなたが、いらつしゃつちや、いけない」と夫を病院の外に隔離させる。それというのも、「あたしは、ここにいるのが、一ばん楽なの」という理由によるからだ。すでに言及したように、男女の隔離が生じるのは、女性性を「不潔」と観念する一方で、男性がそのような「不潔」とは無縁な存在だとする二項対立的な性差意識が主人公の女性の内部に働いていることが考えられる。「不潔」は日本の固有宗教の〈汚れ〉に通じている。性差はそこに宗教性がからんだとき、社会的制度、あるいは文化となることを端的にうかがわせてくれる象徴的な場面である。

それとともに見逃してならないことは、妻にとっての夫の変貌は、前掲「女生徒」における少女にとっての父の位置とアナロジーであることだ。やはり夫は強くて頼りになる存在だという主人公の新妻の思いを規制しているのは、この小説空間の狭さが関係していよう。主人公にとって自己の世界は夫との夫婦関係に限られている。この小説における主人公の心理の動きはすべて夫との関係の中でおこっている。そのことは小説世界が新婚の世帯という小宇宙を守っていることによる。そのような小宇宙にとって夫（男）は絶対的な存在であった。なぜ夫（男）が絶対なのかと言えば、妻（女）の精神の内部に沈潜している、女は「けがれ」な者という意識があることによる。

「女生徒」と「皮膚と心」に浮き彫りにされている、〈汚れ〉あるいは〈不潔〉といった規準による性差にもとづく人物造型は、ことさらに家という小宇宙に限定した中での男性優位主義に起因する性差概念であると考えられる。そのような空間設定を施すことで、太宰は意識的にかあるいは無意識的にか、主人公の意識の屈折を通してジェンダー意識を明確にさせているとも言える。

五、むすび

いままで「女生徒」と「皮膚と心」に流れている女性性の不潔さ・男女の性差意識すなわちジェンダー意識を作品分析を通して明らかにした。「女生徒」と「皮膚と心」の背景にあるジェンダーの世界は伝統的な日本社会から作り上げられたことが明確になったと思われる。また太宰は二つの作品を通して、家という空間を根源に男女のあり方を描こうとした。そこには女を「けがれ」者と認識し、男を家の中心として捉えようとする太宰のジェンダー意識が明らかにされている。このような意識は、津軽地方の大地主の六男として女性の多い家庭で育てられた太宰にとっては身近い観念だったに違いない。男尊女卑思想がもつとも強い東北地方の津軽には女性性は「不潔」だという意識が根強く残されていることから推察できる。

津軽地方でも、神仏15)に加護を祈る出産であつても、産をげがれとする観念が強く、血の忌みとして慎む行為が多く、きびしく守られている。

子供を産んだ後も、7日間16)は、家族のものとは別火のものを食べ、外にも出ず、陽もさけていた風習があるほど、産婦は祭物として扱われていたのである。それは言うまでもなく、女性性が汚れものとされる意識の強いことが原因として考えられる。

「女生徒」と「皮膚と心」の背景に流れているジェンダー意識には、太宰の意識の根底に内在している女性に対する観念が反映されていたとも言える。すなわち「女生徒」と「皮膚と心」のそれぞれの主人公には日本社会から決めつけられていた女性性に対する観念を自覚して、それを女の宿命として受け入れている女性像が描かれている。

注

- (1) 原子朗「太宰治における〈をんなの言葉〉」(昭和六十一年一月【国文学】)
- (2) 渡部芳紀『女性——女の独白形式』(平成三年四月【国文学】)
- (3) 外村繁『文芸時評』(昭和十四年四月)
- (4) 嵐田利美子「太宰治の作品の女性語についての一考察」(昭和五十一年二月【日本文学ノート(宮城学院女子大)】十二)
- (5) 玉野井芳郎監修「ジェンダー・文字・身体」(昭和六十二年十二月)——日本におけるジェンダー世界(討論)の中のナタリー・サミュエル・デービスの性役割転換に関する論文引用
- (6) 荒木美穂「太宰治の女性独白体——その女性読者に与える『不快感』について——」(平成四年2月【帝塚山学院大学日本文学研究】一三三)
- (7) 三戸武夫『文学界』(昭和一四年十二月)
- (8) 川端康成「小説と批評——文芸時評——」『文芸春愁』(昭和一四年五月)
- (9) 中村地平『新刊書評』(昭和一四年九月)
- (10) 同註(2)
- (11) 昭和十六年十二月「婦人公論」の広告参照——「皮膚と心」には実際化粧品会社資生堂の商標だと思われる「蔓バラ模様の商標」が出ている。
- (12) 玉野井芳郎監修「ジェンダー・文字・身体」(昭和六十一年十二月)——日本におけるジェンダー世界(討論)
- (13) 山下明子「日本のセクシュアリティ——フェミニズムからの性風土批判」(平成三年十二月) 法蔵館
- (14) 同註(12)
- (15) 和歌森太郎「津軽の民俗」(昭和四五年三月)

(筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科文学専攻 イ ヒョンジュ)